



なごや「聖歌」だより 6月号'09

「祈り」を支える

ロシア聖歌というと、男声あるいは混声による大合唱を思い浮かべる方が多いでしょう。街の教会ではアマチュアの小さな聖歌隊が大半ですが、大修道院や大教会では『祭日聖歌隊』というプロの聖歌隊があって、日曜日や祭日に大規模な合唱聖歌を歌います。声楽の訓練を受けた人たちが構成され、定期的に練習し、主教、総主教の列席する大がかりな祈禱にも対応します。音楽的レベルも高く、国内外で公演することもあります。

スレーチェンスキー修道院の聖歌隊は、そうした『祭日聖歌隊』のなかでも最も優れた聖歌隊の一つです。2000年から2005年まで聖歌隊を導いたアンブロシイ主教(現ペテルブルグ神学校校長)は、プロとしての高い技術を生かしつつ、『祈り』の聖歌、礼拝としての音楽を重視してきました。

師は赴任当初をふりかえって、「歌は上手でしたが、クラシックの芸術作品と同じように歌っていました。たとえば『ロシアの新致命者受難者のための祈禱』のテノールのソロは美しい音楽でしたが、たましいがありませんでした。そこで私は、スレーチェンスキー修道院のあるルビヤンカという場所は多くの血が流された受難の地であったこと、当時、家族の誰かが逮捕される恐怖に常に怯えた日々であったことに思いを馳せてくださいと言いました。すると、音楽が意味をなしました。私の仕事はプロの技術と『教会としての理解』を結びつけることでした。聖歌の内容や奉神礼を理解することで、どんどん向上しました」と語っています。「またモスクワ神学校の学生を招いて交流を行うことで、信仰生活そのものが深まりました。」

私は3年前、堂祭「ウラディミルの生神女のイコン祭」の晩禱に参拝しました。聖歌隊が一瞬の滞りもなく祈りを進めるだけでなく、途中行われたアカフィストでは千人にも及ぶ大会衆の歌を力強くリードし、教会全体が一体となった祈りをしっかり支えているのを目を見張りました。

今回頒布品としてスレーチェンスキーのものを中心にCDをいくつか取り寄せました。お手持ちのものとも聞き比べてみてください。自由な教会活動ができなかった共産主義時代の録音には聖歌をもっぱら音楽として扱っているものも少なくありません。音楽と祈りの一致、目に見えませんが大切なポイントです。

アンブロシイ主教のインタビューはスレーチェンスキーのサイトPravoslavieから引用しました。Pravoslavieは大変充実したサイトで、ニュースや論文の他に聖人カレンダー、祈禱文など役に立つ情報が多数掲載されています。英語のページもあります。<http://www.pravoslavie.ru/>



スレーチェンスキーのCDのご紹介

- ・復活祭早課時課 (お馴染みの「マリアとともに」も)
- ・大斎と受難週 (2枚組)
- ・ロシアの新致命者と受難者のための祈禱
- ・スレーチェンスキー神学校の晩禱
- ・聖体礼儀
- ・驚くべき奇跡、ロシアに建立された十字架の木
- ・ロシア歌曲民謡集 (これはオマケですが楽しいです)

取り寄せにあたって、モスクワ在住のユリア・ベストレミヤナヤさんとサーシャ・バズデンコヴァさんのご協力を頂きました。日本では手に入れにくいCDです。各1~3部のみです。以下のサイトで視聴できます。
http://choir.pravoslavie.ru/page927_0.htm

聖歌練習

♪名古屋: 代式後基礎練習。6月14日21日

代式祈禱は「お休み」ではありません。司祭不在の時、信徒が代わりに「礼拝を守る」日です。

発声音取りなど基本的な技術向上もめざします。

♪半田: 6月10日(水) 11:45ごろから

6月の指揮当番

7日 ピーメン松島 28日 エレナ広石

ズナメニイ研究会 再開 第3回

6月20日土曜日10:00から

ズナメニイ聖歌の研究会を再開しました。前回は「パスハのトロパリ」をクリュキー(記号)の両方が書かれた資料を手引きに、記号の読み方の練習をしました。今回は「常に福」6調を用います。また、19世紀に採譜され四角音符で記録された聖歌集から「主は神なり」などをスラブ語で歌い、日本語にもあてはめて歌いました。ズナメニイはロシア聖歌の基本です。ほかの教会芸術のありかたと密接に関連した聖歌の神秘を探ってゆきたいと思います。どなたでも参加できます。内容は以下のサイトに掲載しています。

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy/Znameny/>

礼拝の中にある音楽的要素をざっと眺めてみましょう。一般的にイメージされる「歌」より広範囲の「音楽」を含みます。たとえば、一番シンプルな音楽の形は聖詠唱（詩編唱）でしょう。正教会で「誦経読み」と呼ばれるものです。誦経者（読み手）が聖詠（詩編）や祈祷書にある文章を、同じ音の高さで、まっすぐにすべるように読みます。ラテン語のレクト・トノ *recto tono* です。とてもシンプルですが、これも一種の音楽です。

次に、もう少し動きのある音楽的要素としてエクフォネシス（高声）があります。輔祭や司祭が連祷のときに行う祈願（～祈らん、～願う）、高声（今も何時も世世に～）などで、各節の最後に、聖詠唱よりも大きな音の変化があります。ギリシアやロシアでは福音書を読むときも一定のメロディをつけて唱えることが多く、これもエクフォネシスに含まれます。エクフォネシス記号で読み方を示したテキストもあります。

聖詠唱やエクフォネシスは厳密に言えば「歌」とは言えないかもしれませんが、普通の話し方や朗読とは異なり、一種の音楽と言えます。

いわゆる「歌」も、ことばの音節にひとつずつ音をあてはめたシンプルなものから、メリスマとこぶしいう複雑な小節を使うものまで、さまざまな段階があります。一人で歌うもの、ユニゾンで揃って歌うもの、合唱、聖歌隊の数も一つ、二つ、それ以上の場合もあります。正教会の礼拝では、普通の話し方は説教以外には行われません。

また、正教会にはローマ・カトリックの「誦読ミサ」のように全く歌のない祈祷はありません。晩堂課や平日早課のように、いわゆる「歌」らしい歌がほとんど含まれない場合でも、聖詠唱のようなシンプルな音楽が含まれます。

正教会では本来「歌う」と「読む」は同意語として用いられてきました。かつてロシア人は「礼拝する」ことを「歌う」と言いました。修道院の目覚まし係の修道士は、夜半課や早課の時間がくると、仲間の修道士に「歌う時間だ。祈りの時間だ。主、イエス・ハリストス、我が神よ、我等を憐れみ給え」と呼びかけました。1551年の

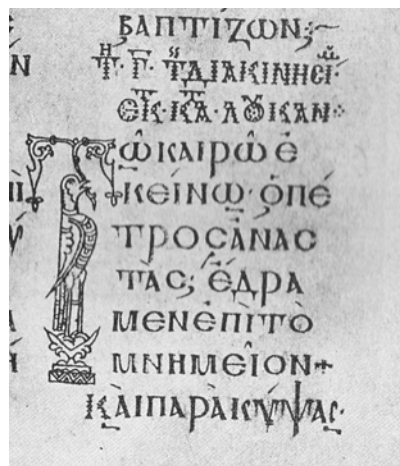
ストグラフ百章会議の記録には「信徒は妻や子供を伴って教会に来なければならない。信と愛とを以て聖なる歌に立つべきである」とあります。またティビ

コン（礼拝規則書）にも「歌う」と書かれていて、「以前にも歌について述べたが、聖伝に従って聖詠やほかの祈祷文を歌うこと以外に、修道生活だけの特別の規則はない」とあります。

正教会の礼拝は、聖詠唱のようなシンプルな音楽から、複数の聖歌隊で行う大合唱まで、さまざまなレベルの音楽があり、それが刻一刻と変化します。聖詠唱とエクフォネシス、エクフォネシスと歌の間に明確な境界線はありません。礼拝の特徴や祈祷文の内容に従って、ふさわしい音楽が与えられた「ことば」が聞き手に提示されます。

聖歌は礼拝の一部ですから、聖歌の形が礼拝そのものによって規定されるのは当然です。聖歌の発展を知るために、礼拝の式順や祈祷文の発展の歴史を考察してゆきましょう。

Johan von Gardner, *Russian Church Singing*, SVS



エクフォネシス記号のついたビザンティンの10世紀の写本
(Cod.Sinait.204,saec.x) E. Wellesz, *A history of Byzantine music and hymnography*, Oxford, 1949から転載



エクフォネシス記号のついたロシアの11世紀の写本 (Ostomirov福音書/現存するロシア最古の福音書) 以下のサイトで見られます。
<http://www.nlr.ru/exib/Gospel/ostr/ill.html#top>

ホームページのご案内

○ 「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が開けます。「聖歌だより」のバックナンバーもダウンロードできます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgia> 奉神礼や聖歌の実践資料